

# 宗我部義則先生のアイデア



宗我部義則

埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。「教育課程実施状況調査問題(中学校国語)」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。

## 「ずばりひと言」の鑑賞文

「竹」(二年)

読む

萩原朝太郎作品の中でも、取り上げやすい詩ですね。子どもたちは、「生え、」の繰り返しがおもしろい」と感じるはず。その秘密を考えるような形で、繰り返しや連用中止の表現に注目させたいと思います。

## 感じたことと表現とをつなぐ

音読では、「生え、」の後の余韻を想像しながら読み方を工夫することで、描かれている竹の姿をイメージさせたいです。その後は、「竹が生え、竹林には静寂が訪れた。」などと、「竹が生え、」の後に続く「ずばり

ひと言」の鑑賞文を書かせるのもおもしろそうです。音読して感じたことと表現とをつなぐんです。

ただ、その際は、子どもたちが取り組みやすいように、文型は教師のほうで示しておきたいところです。例えば、「あたりは一面、にぎやかな感じになった。」のように、「○○は、くだ／＼になった。」という型。それから「作者は、真つすぐな気持ちでいる。」のように、「(自分も含めて)作者は、く／＼な気持ちだ。」という型もあるといいかもしれません。

身の回りに竹林がなく、その清冽な感じを想像するのが難しい場合もあるでしょう。そんなときは、授業中、青々とした竹や竹林の写真をスクリーンに映すなどでできればいいでしょうね。きつと、感じるイメージが違ってくるはずですよ。

## 筆者の思いを追体験する

「生物が記録する科学」  
——バイオロギングの可能性——  
(二年)

読む

すつと読めて、いつの間にか筆者に共感してしまふ。そんな力のある文章ですね。調査を進める筆者の、わくわくする思いを追体験しながら読ませたい説明文です。

筆者の心の動きを率直に感じるには、文章中の「事実」と「そこから筆者が考えたこと」の関係を押さえるのがいいでしょう。デジタル教科書を使い、この二つを色分けしていくのもいい方法ですね。

説明文の授業では、概念的・論理的な理



「生物が記録する科学——バイオロギングの可能性」(2年)

「どれがペンギンかはわかるけれど、なぜこんな写り方なのか。それを考えることで、文章に書かれていた『カメラを背中につける』ということが実感できるんです」と、宗我部先生。



「誰かの代わりに」(3年)

「国語の授業は、種まきです。今はわからなくても、何年後かに、この挿絵のように芽吹けばいい。いつか、この文章の意味にたどり着いたときに、『みんなで語り合ったな』と思いついてもらえる授業にしたいです」。

解だけでなく、身体的・感覚的な理解、つまり「腑に落ちてわかる」ことも大事にしたいと、私は考えています。

そこで活用したいのが、文章中の写真やグラフです。例えば、教科書P44の写真A(写真裏。文章だけではなく、写真を見て「なぜ、ペンギンがこんな写り方をしているのか」と考えるからこそ、「カメラを背中に付けるって、そういうことか」と、腑に落ちてわかるんです。そんなふうには、写真やグラフを使って、子どもたちの感覚に訴え、気づきを引き出したいですね。

**筆者と対話するよう  
に**  
「誰かの代わりに」  
(3年)

読む

これに出会うことが、この教科書を使う意味の一つ。そう言ってもいいほどにすばらしい文章ですね。この文章を深く読むとは、投げかけられたテーマから、自分の考えを紡ぎ出し、友達とやり取りすることなのだろうと思います。筆者・鷺田清一さんが伝えようとしたことを、経験をも

とに話し合い、「こういうことが言いたいのですか?」と、彼に問いかける。それはつまり、鷺田さんと対話するということですね。私はそうした授業がしてみたいですね。

### ディスカッションのスタイルで

考えられるのは、ディスカッションをすることです。まず、子どもたちに、文章で自分がわからない点を短冊に書き出させる。そして、そこから、各自が答えられるものを選び、考えを述べるところから話し合いを始めるんです。短冊には、「こう考えたが、それでいいか」という、確かめの質問も書くようにさせます。そうやって「鷺田さんなら、こう答えるだろう」「私はこう思う」と、考えを返し合うことができました。最高でしょうね。

また、この文章をきっかけに、読書に展開するのも一つの方法です。「自分について考えさせられた本」などとテーマを決めて、読書会を開くのもいいでしょう。

授業の終わりには、『パンセ』の「人間は考える葦である」という言葉(※2)にも触れてみたいです。わからないまま終わってもいい。何年も経って、いつか子どもたちの中に芽吹く。そんな授業になればと思います。

**スピーチを  
インタラクティブに**  
「社会との関わりを伝えよう」  
(3年)

話す  
聞く

わかりやすい、いい教材です。教材の目標は、場と相手の様子に応じた話し方をすることですが、そのためにも、スピーチがうわべだけのものにならないよう、活動に「真正性」、つまり現実味をもたせることを意識したいと思います。

例えば、話題。教科書にも例がありますが、私なら、「考えさせられたニュース・出来事」を設定したいですね。子どもたちが日頃、抱いている社会への疑問・意見に焦点を当てて、「中学三年生の主張」のようなスピーチをさせてもいいかもしれません。

それから、私は、スピーチ力を、スピーチの内容について質問・意見交流することも含めた、インタラクティブなものだと捉えています。この教材でも、スピーチの後に、質問や意見交流の時間を取り、「一往復半」の生き生きとしたやり取りをするこ

**記録・発表の日常化**  
「続けてみよう」(2〜3年)

書く

以前にもご紹介したことがあります(※3)。私は、「言葉の手帳」(一年「続けてみよう」)のように書き留めた言葉を、毎日の国語の時間に発表させるという実践を続けています。

当初のねらいは語彙の拡充、情報収集・批評の日常化でしたが、発表に一人一人の個性が見えてきて、クラスづくりのうえでも大いに意味がありました。ですから、この教材を使って、日常的な記録・発表に取り組むことをお勧めしたいですね。

教科書で紹介されている例は取り組みやすいものがほとんどですが、「創作メモ」(二年)は、とっつきにくさを感じるかもしれません。しかし、あまり形にこだわらずに、一行詩みたいなものや、思いついたすてきな言い回しでもいいので書き留めさせるようにすれば、負担感は減るでしょう。「描写」の学習とつなげて、おもしろそうです。そうして、書きためるだけでなく、少しずつ発表し合っていくことを大事にしたいです。